

令和4年度 専門職大学院法務研究科（法科大学院）（B日程）

小論文（未修者）

注意事項

以下をよく読んで、間違いのないように受験してください。

1. 試験開始の合図があるまで、問題を開かないでください。
2. この問題冊子の3~5ページに問題が掲載されています。落丁、乱丁、印刷不鮮明などの箇所がある場合には申し出てください。
3. 解答用紙は（そのI）・（そのII）の合計2枚です。解答用紙の追加は認めません。
4. 試験開始の合図があったら、すべての解答用紙に受験番号を記入してください。
5. 解答は必ず解答用紙の所定の場所に記入してください。
6. 解答用紙には、黒鉛筆（シャープペンシル可）の他、黒または青の万年筆・ボールペンを使用してもかまいません。
7. 文字ははっきり、ていねいに書いてください。解答の文字が読みにくい場合、点を与えないことがあります。
8. 試験中、使用していない解答用紙は机の上に裏返しにしてください。

[このページは空白です。]

小論文（配点 100 点）

次の文章は、宇野重規「<私>時代の教育と政治」（宇野重規・井上彰・山崎望編『実践する政治哲学』ナカニシヤ出版）から抜粋、改変したものである。これを読んで、下記の設問に答えなさい。

フランスの政治学者マルセル・ゴーシュは、なぜ人は学ばなければならぬかについて三層レベルの説明をしている。

ゴーシュによれば、第一は人類学的レベルである。カントがその教育学講義で述べたように、「人類は教育されなければならない唯一の被造物である」。人は生きていくために、言語を学び、文化を習得しなければならない。既存の言語と文化を自らのものとすることで、はじめて人間は人間となるのである。

この第一のレベルの上に加わるのが、第二の知識論的なレベルである。第一の人類学的レベルが、いかなる時代の、いかなる社会にもあてはまるのに対して、このレベルは近代に特有なものである。近代社会は、知の伝達の基本を学校に置く。それではなぜ学校が必要なのか。それは、伝統社会においては、過去から継承されてきた知の伝統の学習に重きが置かれていたのに対して、近代社会においては、理性をもった主体が自由に学ぶことが強調されるからである。教育とは、人が一方的に過去の権威に従うことではなく、自らの主体性において何ごとかを学ぶことである。すなわち、重要なのは「学ぶことを学ぶ」点にあり、何を学ぶかは、理性の主体となった個人が選ぶべきことである。このように、特定の知識を与えるだけではなく、「学ぶことを学ぶ」ための場が学校にほかならない。何らかの具体的な知識を得るだけなら、学校でなくてもかまわない。しかしながら、学ぶことを学べるのは学校だけである。

近代社会は本質的に未来を志向している。過去から継承された正統的なモデルに従うよりも、現在とは異なる未来を創造することが重視されるからである。教育の目的もまた未来の創造へと向けられている。したがって、自由な主体を作り出すべく、知識を多くもつことそれ自体より、知るための手段を十分にもつことが教育の主眼である。

ゴーシュの三層モデルの第三は、政治的レベルである。ゴーシュによれば、教育の公的機能の拡大には三つの軸があった。第一は普通選挙権であり、そこでは、すべての有権者が互いに競い合う諸政党の主張の得失を判断する能力をも

っていることが期待される。そのような能力を養成する課題が教育に託されるのである。第二に社会の民主化とともに、メリットクラシーのルールが強調されるようになる。すなわち、出自や血統ではなく、能力によって社会的地位が決定されるためには、機会がすべての個人に平等に開かれていることが前提になる。その鍵となるのが教育であり、教育による社会的流動性であった。第三が個人主義化である。フランスの場合、一九〇〇年を前後して、伝統への同化を旨とする過去志向の教育から、個人の自由を強調する未来志向の教育への大きな転換が見られたという。

このような教育に対する三つの要請は、「福祉国家における学校」という形で総合される。すなわち、個人の出発点における不平等を是正して機会の平等を保障すると同時に、可能な限り最善の教育をすべての個人へと開放し、さらにその枠組みの中で個人の自由を最大限に可能にする教育が目指されたのである。この三つの理念の均衡の上に、「福祉国家における学校」は立脚した。

しかしながら、このような均衡は今日、崩れつつある。その原因是、個人主義の傾向が他の二つを圧倒するようになったことにある。ゴーシュはこのことを「学校によるデモクラシー」から「学校の中のデモクラシー」への転換と表現する。このことは何を意味するのだろうか。

現代の学校において、一人ひとりの子どもは、他人とは比べられないものとしての自分の個性について、平等な承認を求めている。ところが、このような個人主義の動きは、究極的には、学校や教育の本質は個人の個性に先立ち、その外部に存在する知を伝達することにあるからである。その場合、知は非個性的で客観的なものでなければならない。しかしながら、自らの個性の承認を求め、自らのパーソナルなあり方にこだわる個人には、なぜインパーソナルな知を自らのものとしなければならないのか、うまく理解できない。結果として、教育によって自由な個人を生み出すことにあるという、これまでのヒューマニズムを支えた教育と個人の幸福な関係が、いまや機能不全に陥りつつあるのである。

子どもたちにとって、もはや自分たちに授けられる知も、それを伝達する教師の権威も自明ではない。彼らにとっての価値とは、他と比べることのできない個としての自己のあり方である。

現代の個人主義からすれば、教育を受けるにあたって、学ぶべきことが自分にとって何を意味するかがきわめて重要になる。「これはまさに私が学ぶべきことだ」、そう思えないことには、人々は学びへの意欲をもてない。

これに対し、近代の教育は、あくまですべての個人に等しく開かれたものであることを理念としている。教育への機会は平等なものでなければならず、その意味で普遍的なものでなければならない。しかしながら、一人ひとりの個人にとつて個別的に意味のあるものを、普遍的なかたちで提供することは、何と困難な課題であろうか。

しかもここで難しいのは、教育において、自分が学ぶべきことの目的や関連性は、学び終えてはじめてわかるという事実である。言い換えれば、学ぶ前にはそれらのことをわかつておらず、結果的にしか知ることはできない。さらに述べるならば、結果的にそれを知ることこそが教育の意義であるとさえ言える。その意味で、教育においては、どうしても権威に頼る部分が残るのである。ここで権威というのは、言葉の本来の意味においてであり、すなわち、人がその理由を論じることなしに承認するものにほかならない。知の権威が存在することで、人はそれを学び、事後的にその意味を了解するのである。にもかかわらず、現代人は人から教わることを嫌い、自分の全能感を求めがちである。このような個人にとつて権威を受け入れることは難しい。

設問 1

学校によるデモクラシーとはどのような意味でしょうか。

(配点：30 点)

設問 2

学校におけるデモクラシーとはどのような意味でしょうか。

(配点：30 点)

設問 3

学校におけるデモクラシーがうまくいかないと著者が考える理由は何でしょうか。

(配点：40 点)

[このページは空白です。]